

(大阪東北部)

## 大阪・大坂城跡

- 1 所在地 大阪市東区道修町一丁目
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)八月～一〇月
- 3 発掘機関 財大阪市文化財協会
- 4 調査担当者 中尾芳治・森 毅
- 5 遺跡の種類 近世城郭及び城下町跡
- 6 遺跡の年代 桃山時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は、豊臣時代大坂城の惣構の西限とされる東横堀川の西方三越百貨店駐車場ビルの南に当る。この地域は古代の阿(安)曇寺

跡の比定地の一つであり、今回の調査はこれに関連して実施したものである。

調査は、現地表下約二・五mにある、大坂の陣(一六一四・一五年)にかかわると推定される焼土層より開始し、地表下四mまで実施した結果、室町時代(一四世紀)

から江戸時代初期(一七世紀初頭)に至る大別して五時期の生活面が確認され、多数の遺構・遺物が出土した。とりわけ豊臣氏大坂城の時期に当る三枚の生活面(二・三・四面)からそれぞれ特徴のある遺物が出土した。





〈第二面〉 焼土層の下から礎石建物や「参石入 捻土」式石入吉「捻土也」などとヘラ描きされた備前焼の大甕を六個ずつ二列、計十二個並べた遺構が検出された。

〈第三面〉 多数のゴミ穴と考えられる土壇が検出された。土壇内には木製品や陶磁器が多量に投棄されており、その中から三・一四点におよぶ木簡が出土した。そのほとんど全てが海魚の荷札木簡と思われるものである。なお、木簡とともに魚骨、魚鱗が出土している。

〈第四面〉 掘立柱とともに、銚型(砂型)や埴鍋、鉢、鉢の羽口など鑄造に関係する遺物が出土した。地金を溶かす炉跡も検出されており、この地に鑄造工房が存在したと思われる。銚型には鋳先の銚型のほかに、直径一〇cmの筒形品に隆帯を施した仏具関係の銚型ではないかと思われるものがある。第四面の下層からは、一四世紀ごろの掘立柱建物跡や溝が検出され、さらにその下層からは古墳時代～平安時代の遺物包含層が検出されているが、阿(安)曇寺跡の存在を示す遺構、遺物は発見できなかった。

今回の調査によって、豊臣氏大坂城の城下町の様相とその形成過程の一端を明らかにすることができた。

8 木簡の釈文・内容

- (1)  大いわし八百入」  
 134×24×4 033 a  
 ・  助九郎」  
 121×28×5.5 033 b  
 (2)  あち五十入」  
 121×28×5.5 033 b  
 ・  江藤与左衛門」  
 131×23×2.5 033 a  
 (3)  に百十さし大むろ入」  
 131×23×2.5 033 a  
 ・  に四  右衛門」  
 (4)  六月廿一日  百入  
 中さは  門尉  
 (115)×24×5 039  
 (5)  一百さし入」  
 123×23×5 033 a  
 ・  又左衛門」  
 (6)  ひ  百八十さし入」  
 125×25×5 033 a  
 ・  三衛門」  
 (7)  ひ  百八十さし入」  
 128×25.5×5 033 a  
 ・  三衛門」  
 136×23×3 011  
 (8)  大たひ十八入」  
 (9)  大ふし三百入甚内」  
 140×27×4 033 a  
 ・  又左衛門殿  土や  
 (10)  六百さし入小たこ×  
 (135)×26×4 039  
 ・  ひろせ与三衛×  
 (11)  よりさは百入」  
 153×23×3.5 033 a  
 ・  新十郎」  
 (12)  いそいを五十  
 (190)×23.5×6 039  
 (13)  五十れん入五    
 194×32.5×5.5 033 b  
 ・  新右衛門尉 清水勘助」

1986年出土の木簡

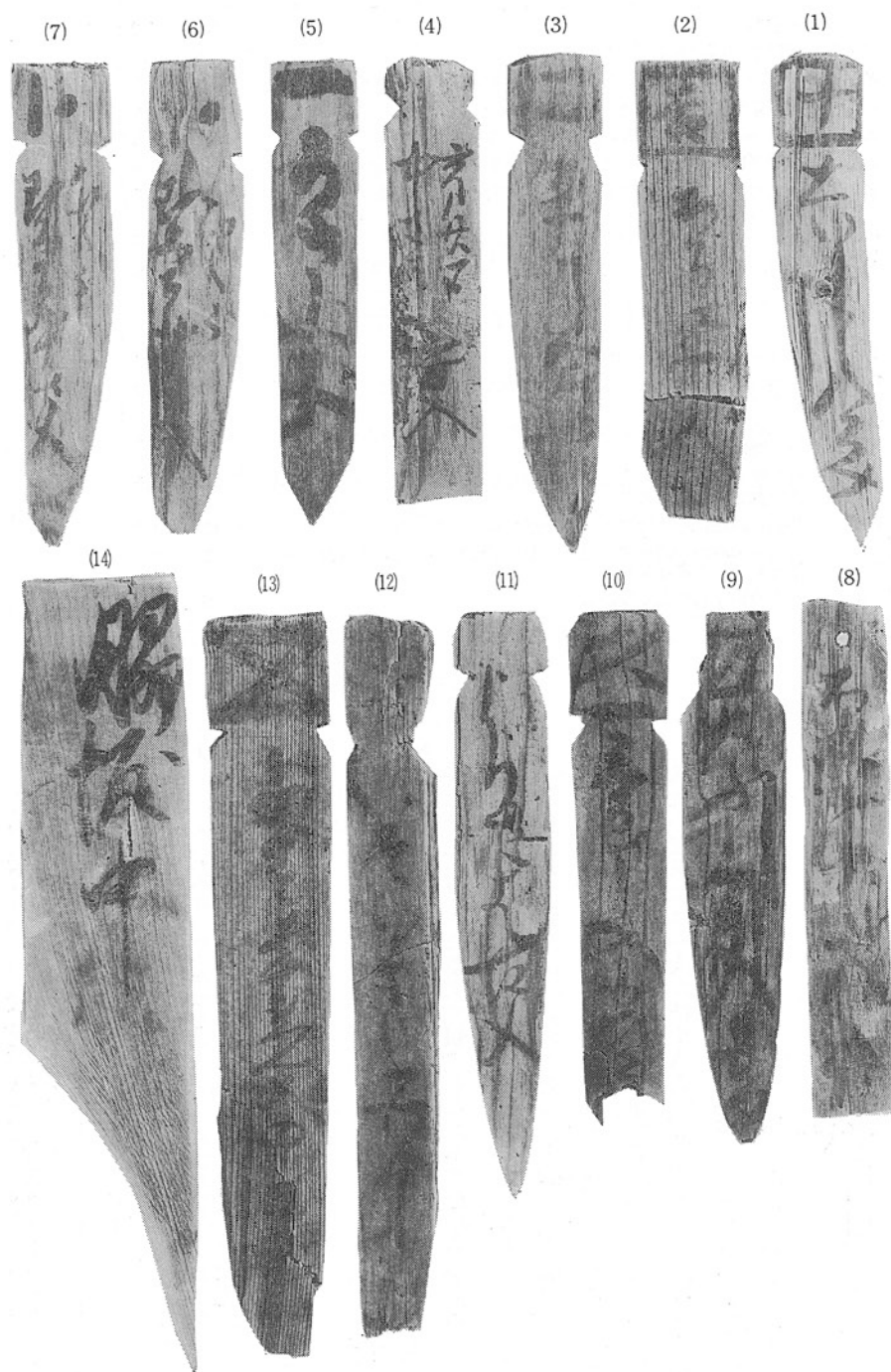


表1 木簡型式一覧

型 式	形 態	点数	%	備 考
011	短冊型	10	3.2	164点 52.3%
016	短冊型で両端を圭頭にしたもの	3	1.0	
019	一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの	24	7.6	
022	小型矩形の材の一端を圭頭にしたもの	2	0.6	
032	長方形の材の一端の左右に切り込みを入れたもの	20	6.4	
033 a	長方形の材の一端の左右に切り込みを入れ、他端を尖らせたもの	53	16.9	
033 b	長方形の材の一端の左右に切り込みを入れ、他端をやや尖らせ気味にしたもの	23	7.3	
033 c	長方形の材の一端を尖らせ、その左右に切り込みを入れたもの	3	1.0	
033 d	長方形の材の一端のいずれかに切り込みを入れ、他端を尖らせたもの、あるいは欠損したもの	3	1.0	
039	長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損、あるいは腐蝕して不明のもの	62	19.7	
051 a	長方形の材の一端を尖らせたもの	17	5.4	
051 b	長方形の材の一端をやや尖らせ気味にしたもの、あるいは欠損したもの	7	2.2	
051 c	長方形の材の一端を尖らせ、他端を尖らすか、あるいはやや尖らせ気味にしたもの	4	1.3	
059	長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損、あるいは腐蝕して不明のもの	28	8.9	
081	折損、腐蝕、その他によって原型が判明しないもの	43	13.7	
A	長方形の材の一端を尖らせて、その頂部に切り込みを入れ、その下部に穿孔のあるもの	7	2.2	
B	以上のいずれにも属さぬもの	5	1.6	
		314	100.0	

表2 魚名一覧

	魚 名	点数	%
1	ろ	31	27.4
2	ろはちちひし	16	14.2
3	(し)	14	12.4
4	(い)	7	6.0
5	ろはちちひし	7	6.0
6	ろはちちひし	6	5.3
7	ろはちちひし	4	3.5
8	ろはちちひし	3	2.7
9	ろはちちひし	3	2.7
10	ろはちちひし	2	1.8
11	ろはちちひし	2	1.8
12	ろはちちひし	2	1.8
13	ろはちちひし	1	0.9
14	ろはちちひし	1	0.9
15	ろはちちひし	1	0.9
16	ろはちちひし	1	0.9
17	ろはちちひし	1	0.9
18	ろはちちひし	1	0.9
19	ろはちちひし	1	0.9
20	ろはちちひし	1	0.9
21	ろはちちひし	1	0.9
22	ろはちちひし	1	0.9
23	ろはちちひし	1	0.9
24	ろはちちひし	1	0.9
25	ろはちちひし	1	0.9
26	ろはちちひし	1	0.9
27	ろはちちひし	1	0.9
28	ろはちちひし	1	0.9
		113	100.0

注「むろ」の中に「むろてす」「あかむろ」「むろあち」「さは」の中に「よりさは」を含む。

総数三十四点の木簡の形態は表1のように変化に富むが、長方形の材の一端の左右に切り込みを入れ、他端を尖らせたもの、あるいは尖らせ気味にした型式に類するものが半数以上を占める。

代表的な例では、切り込みを入れた頭部に「屋号」様の印があり、その下に魚名と数量を、裏面に送り先と送り主の人名が記される。

魚名は表2のように、判明したほとんど全てが海魚であるが、例外として「こひ」のほかに「もち米」各1点がある。

数量の記載には「大たひ十八入」「鯖四拾さし入」「大ひらめ五十れん」「大ふし一束」「こちし一束」「ふ里一ツ」「めちか四十まい」など、さし、れん(連)、束、まい、本などの単位が使用されている。

人名の記載には、(8)「惣左衛門殿七」(右衛門カ)、(9)「又左衛門殿」(其内)、(13)「新右衛門尉 清水勘助」のように二名の人名が記

され、海魚の送り主と送り先を示すとみられるもの、(1)「助九郎」、(11)「新十郎」のように送り主の人名と思われるもの、(4)「 門尉」のように送り先を示すと思われるものがある。人名が一名のみで敬称を付さないものについては、送り主か送り先か明瞭でないものがある。例えば「惣左衛門」名が四点あるが、これが(8)の「惣左衛門殿」と同一人物であるとする、敬称は付されていないが送り先を示すものかも知れない。いま、殿、様、尉などの敬称を付すものを送り先、付さないものを送り主と仮定すると、前者には一〇名以上、後者には四六名以上の人名が判別できる。また、重出する人名に「助九郎」(七点)、「惣左衛門」(五点)、「うめちよ」(三点)、「新三郎」(三点)などがあり、「ひろせ」姓を冠する人名が五点認められる。なお、(6)(7)は全く同一型式・内容をもつものである。

以上のような荷札木簡の内容や出土状況からみて、豊臣時代に調査地付近に魚市場が存在したことが想定される。

一方、大阪水産物流通史研究会編著の『資料大阪水産物流通史』(三一書房、昭和46年)などによると、天正十一年(一五八三)九月に始まる豊臣秀吉の大坂城築城と城下町の建設に伴い、それまで天満鳴尾町にあった海魚商人が、新開地の船場鞆町・天満町に移転した。元和四年(一六一八)、生魚を扱う商人は上魚屋町(現安土町一丁目、備後町一丁目)に移り、塩干魚商だけが残ったが、これも交通の便が悪くということで元和八年に津村葭島に新鞆町、新天満町を拓いて

移転した。それに伴い旧住町は本鞆町、本天満町と改められ、明治五年に現伏見一丁目になったことがわかる。

木簡の出土した道修町一丁目は、豊臣時代に海魚市場があったとされる鞆町(のち本鞆町、現伏見町一丁目)のすぐ南に接しており、文献史料と考古学的調査によって海魚市場の存在が実証されたと考えよう。

なお、木簡と伴出したものとして注目すべきものに、次の墨書のある木器片がある。

#### (14) ・「脇坂中

・「脇坂中書様御借 也」  
〔此カ〕

(200.5)×43×20 0032

「脇坂中書」は、賤ヶ岳の七本槍の一人で秀吉恩顧の大名として知られ、天正十三年(一五八五)に従五位下中務少輔に叙任された脇坂安治(一五五四～一六二六)のことを指すと思われる。安治は、文禄元年(一五九二)、慶長二年(一五九七)の朝鮮の役に際して水軍として出動したほか、関ヶ原合戦(一六〇〇)直後は西国船出入の抑えとして大坂川口の警衛を家康から命じられるなど水軍を統括した人物であり、当時の水陸の交通の要衝であった調査地一帯と何らかの関係をもっていたことを示すものであらう。

木簡の整理については主として鳥居信子(大阪市文化財協会)が当たり、釈文については藤本篤・田中豊(大阪市史編纂所)、渡辺武

・内田九州男（大阪城天守閣）、相蘇一弘（大阪市立博物館）各氏の教示を得た。また、大阪における魚市場の沿革については大阪市水産物卸協同組合理事酒井亮介氏の教示を得た。

## 9 関係文献

森 毅「船場」道修町の発掘調査」〔『葦火』五号 財協会 一九八六年）

（中尾芳治）

## 『長岡京木簡一』

向日市教育委員会発行  
コロタイプ図版 B4版 51枚  
解説 A5版三二〇頁  
一九八四年刊  
頒 価 図録・解説共 一五〇〇〇円  
解説のみ 四五〇〇円  
送 料 不要  
△申込先▽ 真 陽 社

## 大阪・安堂遺跡 あんどう

- 1 所在地 大阪府柏原市安堂町
- 2 調査期間 一九八五年（昭60）二月～一九八六年二月
- 3 発掘機関 柏原市教育委員会
- 4 調査担当者 竹下 賢・桑野一幸
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（大阪東南部）

安堂遺跡は柏原市のほぼ中央部、大和川と南河内地域を北流する石川との合流点に臨み、生駒山系西麓南端の狭隘な谷口扇状地上に

立地する。標高約一八mを測り、大和川水面との間に大きな比高差はない。今回の調査はマンション建設に先立ち実施したもので、発掘調査面積は約六二〇㎡である。

調査では弥生時代の溝、土壇、奈良時代の掘立柱建